時事新報

政熱の冷却

今年は嫌てより政客の間に物議の種多き年とて議院の爭論は必ず目ざましきものあるべしと大に待設けたるものなきにあらざりしが蓋て愈よ議院開會となるや人心案外に平穩にして議會にも又大波瀾なく國民は敢て議院の言論を馬耳東風に聞き流すと云ふにあらざるも去りとて又あれが爲めに萬事を閑却するにもあらず悠々として其爲さんと欲する所を爲しつゝあるものゝ如し政黨者流に評せしむれば人心萎微の爲す所なりと云ふ可く政府黨に云はしむれば民心伊藤内閣に謳歌するが故なりと云ふ可くして立つ所の地位の異なるによりて見る所も亦異なりと雖も我輩の見る所は此に異なり日本國民が過度に服用したる政論劑の瞑眩より醒めかゝりたるものにして人心漸く平狀に回復したるの兆候にみそれば極めて賀す可き事と云はざるを得ず抑も政治の目的とする所は人民の幸福を保護するに在りて必ずしも身しひ可きにあらずと雖も又十數年間民間の政客が熱したる程の重要なる事にもあらず畢竟するに商業工藝等の事柄に比して輕重はなかる可し政治能く國家の興廢を致す可しと云へば商業工藝も亦然り黨派の紛紜を拂ひ目前の利害を離れて眼界を一段高く据ゑんには政治と商工とは共に國家の要素にして毫も差異なきを見る可し然るに二十年來、在朝の人々が富貴功名の門を政府に限らんとするの見識を演じ如何なる大商業家にても如何なる大工業家にても政府の官吏に對しては俯服頓首せざる可らざるの勢を成し社會の萬事、文明に赴く中に於て此一事のみ依然たる封建の古色を存したる結果として所謂青雲の後進輩は皆相率ゐて政府に入らんとするの傾向を生じたるゝと一時の流行病なれ或は彼の在野黨は求むる所此にあらず政弊の改革にありと云ふ者もあらんかなれども彼等とても政府に入らんとするの方法に於て聊か異なる所あるまでにして其志を得て雲上に威張らんとするの情に於ては後進輩が直に權門に哀を求めて驥尾に附かんとするものと大差あるみとなく唯此れは裏門を窺ひ彼れは表門より入らんとするの相違のみ一般の人情此の如くなるが故に一時は商業も工業も一切政論に吸收せられて顏色なく選擧と云へば鋤鍬を擲て奔走し彈劾の上奏と云へば算盤を捨てゝ議會の方に目を配り開會中は百事殆んど手につかず恰かも相撲芝居に凝りたる者が湯屋髮結床の噂に浮かれて生業を忘却するに似たり立憲國民として政治を以て他人の事とせず自身の家事の如く感ずるは尤もの次第ながら熱中の餘り狂奔に顚倒するものあるは我輩が多年の遺憾、これを評して封建時代の傳來士族相應の政論劑を過用して瞑眩を生じたるものと云ふも過言に非ざる可し然るに今や幸にして人心其平狀に歸り政治は一國を組織する一小部分の事にし商業は商業、工藝は工藝、各々獨立の門を張て富貴功名、必ずしも政府に限らず否な富貴功名の大なるものは却て政治以外に存するの事實を發見し爲めに政熱を減じたるは我輩の素論空しからざるを表するのみならず一方より云へば國民の實力非常に發達して區々二三政治家の力を待るの要なきと共に更らに大に自信の力を增加したるの證據として見るべし若し此事實を驚ふ者あらば今日の政治家が朝に在ると野に在るとを問はず實業家に對するに前日傲慢の態なくして却つて汲々として交を温めんとして得ざるを怨るゝの狀あるを見て知るべし即ち富貴の力能く政權を吸收したるものにして今後實業家の責任益す多きを加へたるものと云ふべきなり

雜報

○臺灣從軍記

一月十九日　特派員　小山禎三

（十六日報告）

賊巢横溪を屠る

横溪は臺北の正南十里許にある匪徒の巢窟なり首魁翁六舍なるもの實に此處に潛伏せりと云ふ討伐隊は之を挾攻して醜類を滅絶せんとて二縱隊に分れ右縱隊は神田少佐の二箇中隊より成り一月十五日午前十一時臺北を發し三角湧を經て横溪に向ふ左縱隊の本隊は歩兵第九聯隊第一大隊の一箇中隊及び臺北府守備隊二中隊砲兵一小隊より成り内藤大佐之を率ゐて翌十六日午前二時臺北を發し暗孔を經て横溪に向ふ暗孔とは一溪數部落の總稱にして内に四座の砲壘あり是れ匪徒の據て以て我に抗せし深巢なり内藤大佐は往く〳〵此魔窟を燒き拂ひつゝ同日午前第十一時分水嶺横溪兩地の中間に於て神田枝隊と相會したり此處には五六の部落あれども人民更に居住せず只賊魁翁六舍の屋内には家什器具等尚ほ散亂し今朝までは住居せしも討伐隊の至るを聞て俄に遁逃せるもの〻如く附近諸部落は土匪に與する徵候あるを以て悉く之を燒夷せり該部隊は是より轉じて屈尺に至り其附近の諸部落を搜索して目下天車向方の生蕃地に遁逃せし匪徒を挑出して之を剿滅するの手段を取り居れりと

宜蘭沿岸の海門艦

（十二日報告）

去る十日午前六時基隆を發して蘇澳に向ひたる海門艦は途次龜山嶋を砲擊するの目的を以て該嶋附近にあり小漁舟に近づき漁夫を乘艦せしめて取糺したるに嶋は豫てより嘗高き海賊の集合地なるゝ今回の土匪には關係なきもの〻如し依て漁夫五名の内二名を本艦に留め他を小舟に乘らしめ直に該嶋に至り人家ある塲處に陸戰隊を上陸せしめ彼の二漁夫を案内者となしたり然るに陸上の模樣は豫想外にして敢て怪むべき者もなく三四十戶の寨村に只漁夫の住するのみ各戶に就て取調べたるも武器の如きは一も見當らず頭圍より難を避けて渡來し居るもの七十一人（壯男僅に十餘人他は老幼の男のみ）あり其人名職業等に就て調査を遂げたる所何れも頭圍の紳商なりと云ふべきもの〻如し斯く一體の狀況總て無事なりければ海門艦は直に同嶋を出帆して頭圍に至り河口を距る凡そ二千米突の處に於て陸上の狀勢を窺ふに頗る疑はしく土匪充滿するもの〻如かりしにぞ左岸に向ひ砲擊せしに左岸北方の海岸にある二箇所に旭旗を飜して其下に數多の人民群集し且つ小舟を浮ぶる用意をなすもの〻如し依て直ちに砲擊を止め取調べたるに彼等は曩に横田陸軍中尉を敵護したる親切なる良民にして其當時の模樣を說明し且つ同中尉自筆の書面をも所持し其僞りならざるを以て言中聊か疑を存するも全く發砲を停止し彼等に還せり彼等が談話の大意は左の如し

昨日宜蘭より日本兵二百名來り頭圍にある匪徒四百を擊破して其二百を殺し横田中尉を救ふて直に宜蘭に引退せり殘賊は西方十五里の山中に逃れ頭圍は良民のみなり云々

宜蘭附近の混成旅團

（十三日報告）

後備歩兵第八聯隊第二大隊は前田聯隊長之を率ゐて新發田丸に乘込み去る十二日午前二時基隆を發し同八時五十分蘇澳に着して正午までに上陸を終り直に三縱隊を編成して右翼縱隊は冬瓜山羅東を經て宜蘭に、左翼縱隊は紅水溝保、叭哩沙大營、紅柴林庄、大三圍左に、中央縱隊は其中間を取り共に宜蘭に前進せり途すがら銃器刀槍を執て抵抗せしもの若くは之を屋内に藏匿し厳重なる探査の後始めて發見せられたるもの或は匪徒にして宜敎師に僞裝せしものは悉く之を銃殺し其兇器家屋は一切之を燒燬したり中には進みて道案内となり或は匪徒に加盟せしものを指示して我に便益を與へたるもあり彼等の言に由るに頃日匪徒は礁溪の方向に逃走せりと通譯官をして順良の土民老嫗の婦女等には後來の所行に就て懇々說諭せしめつゝ宜蘭に着せしは十三日午後四時より守備隊長兒玉中佐の言に依れば此頃は匪徒の襲來なく宜蘭は至極平穩なり

旅團司令部

（十四日報告）

又旅團司令部幷に歩兵第八聯隊第三大隊砲兵中隊（一小隊欠）工兵小隊は去る十四日午前中に上陸を終り同午後出發二縱隊となり一は海岸に沿ふて利澤簡附近まで一は樟腦山方向に向ふて紅水溝附近までの掃蕩を終り十五日宜蘭に集合すべき豫定なりき

○複線式電氣鐵道

電氣鐵道の複線式と單線式の利害に就ては其專門學士間にも種々の說ありしが此頃米國遊學中の電氣工學士小木虎二氏より東京電氣學會の學友に來りたる書狀に據れば複線式電氣鐵道は利あつて害なきもの〻如し今其書狀を左に錄して電氣鐵道事業者の參考に供す

前略當州にて名高きシンシナタの複線式電氣鐵道は米國唯一の複線式電氣鐵道にて有名なるものなれば態々見物に出掛けたり扨て想像と實際は一般に符合するかと云ふに政府は單線式を許可するなり現に同市内の一局部には別會社にて單線式を施行し居るなり同市よりカビングトンに通ずる一線はヲハイオ河を隔てゝ複線式より單線式に變換する樣に裝置しあり兩式の最も良き比較なるがイツモ厄害はカビングトンの方に起るを見ても知るべし第一困難の少なきは發電所内サーキットブレーカー自働安全機の燒け述少なきを見ても判し得べし其違う方如何は別問題なれば別に述ぶるみとし致候單線式に比して便利なる點は分かり切つて居れども第一他に及ぼす電氣的影響は勿論無之ボンド（軌條接續地中電線）並に地中線を要せず塵埃の堆積又積雪等の爲めレールと車輪間の導電に關する憂なくトロリーのグラウンド（電車屋上導電竿の故障）の爲め全部の交通運轉を中止するの憂なき等充分當初（複線式に要する）幾分の增費用を償ふの要素なちんか生は何か不便利わらんに出掛け在每夜鄙便局前ファウンテーンスクエーアに出掛け二夜見張りたり一分時間に此トラック（軌道）を通過する車臺の數十臺又は十一臺に達するみとあり是は多分米國にてトラフヂック（乘客）の繁き第一なられ此類繁なる交通にトロリーを見張り居るにスパーク（火花）を見しみと一兩度に過きず實にうまいものなり小生がシンシナタの複線式電氣鐵道に岡惚れしたる戀の初めと御承知あれ云々

○浄瑠璃の

第七回　月前の書

却つて說く竹内玄齋は判事松岡を識別せしには相違なきみとを識別せしに相違なきみとを事の起る可き由緣なしと思定知らざるを以て見れば一時は心憎しと心中に思案せり左明なるの時到れりそは別義害せし兇行者の發見されたる者は息絶えて在りたり其死樣形狀にて自殺と察せられたり の次第と其之を致したる理由通の書置あり今ふの書置と新據て彼の老魔真光が燒死の苦と四びしかの原因を探るに抑も此兇行者は殆んど純粹の一人なりしかども黑色人種なる容色至て美麗の少婦なりけより十九年前、楊岡真光が未の夫人れ鶴は長の病に惱み若の頑是なきを育ひに困じ果てたるれ冬と云ふ奴隸あり此少極の美人にして心賢さへ最として防つて侍らせ居りたるを勸めて育て倦みたる樣子もの者よと思ひけり斯て過行意らず卯月の末の花もろ共にを選しけり然るに妻の身退りさぬ或夜のみと主人真光は今合歡の木下なる納凉臺に腰打の名葉を爛らして在りける折る如く餘々たる清光は四邊を池の面に躍る金波さへ最を かゝ然たる遠歩の響、誰ぞやと見女れ冬が年も三五の亮月に花白齒に照を增鏡、鏡の樣なる銀に珊瑚一面を載せたるを白無の中なる香襪蓮さと主人の前許りに差出す其夢のなさ無邪

○世界第一の大男

此頃佛國巴里にカノンバーグと云へる一人の大男現はれたり其長は六呎四分の三吋にして胸の周圍は長と正しく同一なり又腿の太さは四呎一吋、脛は二呎十一吋、二の腕は一呎十一吋にして體重は五百二十封度（六十二貫五百三十五匁）腰の周圍は七呎四吋半なり斯の如く憐格の非常に大なるに似ず其頭の小に肩幅の狹きは一奇にして穴に足は甚小さく能くも此身體を支へて歩み得るものなりと驚く許りなり目下巴里に於ては此大男を入るゝ爲め